

7. 上中部食道癌口側浸潤に関する内視鏡学的検討
神津 照雄（千大）

食道癌治療成績向上の目的で、上中部食道癌口側浸潤病変の内視鏡的および病理組織学的検討を行なった。組織学的に悪性であった小隆起は、黄色、境界不明瞭のものに多く、Falte 様隆起は、主病巣口側中央にその基部のあるもの、Falte 上に黄色隆起をみるもの、びらんについては、発赤中等度、境界明瞭、粗糙を呈する。そのほか、発赤、硬化像を呈する部には注意を要する。上皮内癌の部の内視鏡所見は、うすい粘液付着の発赤、びらんであった。

8. 腎移植における拒絶反応の臨床病理学的研究
西島 浩（千大）

移植腎にみられる血管病変と拒絶反応の関係については非常に密接な関係がある。われわれは、血管壁の急性拒絶反応時の変化と慢性拒絶反応時にみられる硬化性の変化との間のその Genese について検討を加えた。すなわち急性拒絶時にみられる血管壁の泡沫状細胞浸潤および脂肪沈着と血小板の血管腔への集積像との関連について述べ、慢性拒絶反応時の血管壁の硬化像の一部には、少なくとも多少急性時の変化が影響を及ぼしているものと考える。

9. 消化管におけるアセチルコリンエステラーゼ活性の組織化学的研究—第 2 報—
(ヒルシュスブルング氏病の診断への応用)
堀江 弘（千大）、春日 直（放研）

本症の組織診断法としては従来、直腸生検標本の神経節細胞の有無の検索が行なわれていたが、本症の無神経節腸管においては副交感神経線維の著明な増殖が見られる。最近これを組織化学的に AChE 染色することにより本症の診断が可能であるとの報告が見られる。この方法によって本症 12 例、機能性イレウスなど 6 例、計 18 例 32 検体について検索し、本法は粘膜生検標本のみで診断可能で、本症の診断法として有力なものであるとの結果を得た。

10. 術後逆流性食道炎の検討（第 2 報）
赤井 寿紀（千大）

術後逆流性食道炎 142 症例に延べ 223 回の食道鏡検査を行なった。術式別に病変度をみると、腹腔内、胸腔内吻合とともに β 吻合、BII 吻合は病変高度のもの多く、Roux 吻合、有茎移植は病変なし、または軽度のものが

多い。また Roux 吻合では食道空腸吻合・輸入脚吻合間距離が、30 cm 以下では 31 cm 以上より病変高度のものが多い。生検部位別に内視鏡所見と生検組織所見を対比してみると、発赤部からの生検で不一致例が多かった。

11. 交叉熱電対法による胃局所粘膜血流に関する研究
川村 功（千大）

私は、交叉熱電対法を用いて、胃局所粘膜血流測定実験を、成犬で現在まで 75 頭について行なった。血流測定素子は plate type と double needle type が大半を占めているが、この両者で測定した胃体部と幽門部の粘膜血流の比較を、迷切および薬物（とくに、消化管ホルモン）投与を行なって報告した。この方法で、胃局所血流が測定できたことは、消化性潰瘍の病態生理ならびに治療に関連して興味深いことであり、今後さらに実験を続けて行きたい。

12. 先天性胆道閉鎖症の電子顕微鏡学的検討
鈴木 昭一（千大）

先天性胆道閉鎖症はその病因として炎症性因子の関与が問題となり、近年乳児巨細胞性肝炎との関連性が議論されている。その肝の微細構造をみると、肝細胞間隙が拡大し、それに面した細胞膜に多数の microvilli が存在し、また毛細胆管は拡張し、その壁の microvilli は減少し短小化している。肝細胞内にはミエリン様構造を呈する変性物質が多数存在している。細胞内小器官では小胞体の減少と変性が認められる。

13. 吻合部潰瘍の検討

—特に実験的考察を中心として—

中村 宏（千大）

吻合部潰瘍発生と血清 gastrin の関係を知るために、gastrin 値の異なる 2 群の胃切除犬を作った。A 群は antrum pouch 犬、B 群は distal gastrectomy 犬で、ともに BII 法で吻合した。A 群では 5 頭中 4 頭に潰瘍発生をみたのに対し、B 群ではその発生を見なかつた。これは、B 群では extragastric gastrin のみとなり、gastrin 値が低下したためと、また BII 法のため entero-gastron の分泌低下も加わり、A 群では、gastrin relative high level の状態となったためであろうと思われる。

14. 胃迷走神経切離術兼ドレナージ手術々後の検討
—特に内視鏡を中心として—

丸山 達興（千大）